【第四回つばきの国俳句大賞】

二月九日～十四日、国重要文化財・萬翠荘で、伊予つばき協会主催による「第四十五回つばき名花展」が開かれた。この椿展では、毎年新しく誕生した品種が紹介されているが、今年は、「子規」「律」と命名された椿が、今展覧会で初めて披露された。

子規と律は、松山市在住の伊藤一芳氏が育成したもので、平成三十一年に伊予つばき協会の新種登録委員会で新花登録されたものである。子規の花は二重九弁のラッパ型の個性的な形で、薮椿には珍しいクリーム色をしている。律の花は、力強い花芯を持ち淡いピンク色の花びらをつける。

開催にあわせて椿の俳句の募集があり、「つばきの国俳句大賞」には、九十三句の応募があった。選者は、八木健、山口聰（伊予つばき協会会長）、小泉和子（同理事）で、最終日に結果発表と表彰があった。副賞として、大賞と優秀賞三点の俳句を八木健がアートにして贈呈し、椿の苗木や道後の入浴券も贈られた。

□大賞

ままごとにお邪魔してゐる落椿　　桑田愛子

□八木健賞

椿落つ天寿といふにふさわしく　　脇塚耀子

□伊予つばき協会会長賞

落ち椿床打つ音の湿りたる　　黒田俊一

□伊予つばき協会賞

緞帳の椿溢るる郁夫の絵　　小笠原満喜恵

大賞の句は、審査員の一人が「この句がいい！」と、応募用紙を見た瞬間に掴んで離さなかった。つまり、句の方が審査員の心を掴んだということでもある。情景がよく見える素直な作品で、椿を主体にしているところが面白い。

八木健賞の句は、落椿を、人間に使う言葉である「天寿」であると表現したところに、花への優しさや細やかな観察眼が感じられた。

会長賞は、今まさに枝から離れたばかりの瑞々しい花の命の名残が、湿った音で表現されていて見事である。

協会賞は、愛媛県民文化会館の緞帳の椿を詠んだものである。デザインは平山郁夫によるもので赤い椿が全面に配置されている。それは本物の椿の様に鮮やかであり、本物の椿が郁夫の絵のようでもある。

佳作の作品にも面白い発想、新鮮な感覚の句が多く、楽しませていただいた。

□佳作

幼き日椿拾ひて首飾り　　稲田芳子

プリンセス雅子てふ椿を買ひにけり	中西由美子
主なき家の庭なりやぶ椿	渡部昭弘
城跡へ続く坂道藪椿	怒和ノリ子
椿大輪わたししあわせ目があって	源のぶ子
さむいよるつばきがさくとあたたかい	太田杏菜
花芯みえぬ椿その名「さつま」とか	大下美智子
峠道椿トンネル海広し	清水國香
メジロヒヨつばきの蜜を競い吸う	田代善二
落ち椿孫ら競いて拾い合う	田代初美
小鳥舞い椿めぐりの蜜の旅	清水栄作
椿大輪切岸の海へ散る	三好愛子
子規と命名椿交配二十年	伊藤一芳
黒椿コロナ退治と呪い咲け	太田望仁
句になること知らず微笑すいよ椿	山田紅衣
仰向きて椿の下を通りけり	山田行子
パンプスを吾子ずるずると紅椿	渡部美香
フラメンコ裾ゆりかえし黒椿	岡田廣江
飛鳥乃湯泉の艶な湯上がり紅椿	山田真佐子
ペダル漕ぐああ生きているあっ椿	上山美穂
来世は薔薇にならうか八重椿	日根野聖子

子規

律

左から桑田さん、八木健、脇塚さん、小笠原さん

第四十五回つばき名花展会場

第四回つばきの国俳句大賞

大賞

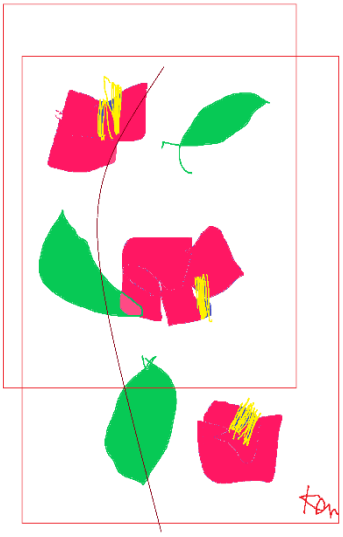
ままごとにお邪魔してゐる落椿

桑田愛子

第四回つばきの国俳句大賞　伊予つばき協会賞

緞帳の椿溢るる邦夫の絵

小笠原満喜恵



第四回つばきの国俳句大賞

伊予つばき会長賞

落ち椿床打つ音の湿りたる

黒田俊一

第四回つばきの国俳句大賞　八木健賞

椿落つ

天寿といふに

ふさわしく

脇塚耀子